

郷土を学び，郷土を伝えるユンヌフトゥ バ学習の教材開発

学校名

鹿児島県与論町立与論小学校

所在地

〒891-9304
鹿児島県大島郡与論町朝戸1445番地

1 研究課題設定の理由

(1) これまでの経緯

本校は鹿児島県の最南端に位置する与論島のほぼ中心に位置する。与論島は一島一町で構成されている。鹿児島県本土とは570 km離れ，沖縄県の北端とは25 kmという近さである。与論島では昔から琉球文化に影響を受けている面が多く，現在もその色合いは強い。生活様式や文化だけでなく，与論島全体で用いられる言語（方言）ユンヌフトゥバは，沖縄の方言とも共通するところも多い。



昔から島でつかわれてきた方言「ユンヌフトゥバ」であるが，時代の流れとともに共通語が多くつかわれるようになり，また，旅人（タビンチュ）と呼ばれるIターン者も多く来島し，与論島で生活するようになったため，保護者世代はユンヌフトゥバよりも共通語を用いることが多くなった。それでも，島に住む高齢者の日常の会話やもともと与論人（ゆんぬんちゅ）同士の会話は今でもユンヌフトゥバが主であり，島の人々はこのユンヌフトゥバを島の宝として，いつまでも残していきたいという願いをもっている。

このような地域の願いを受け，本校では郷土教育の一環として，平成17年度より総合的な学習の時間の一テーマに掲げ，地域の民俗学の研究に携わっている方を指導者に迎え，挨拶や日常会話などを学ぶ時間を設定し，ユンヌフトゥバ学習に取り組んできた。

(2) 学校の課題から

これまで取り組んできたユンヌフトゥバ学習は，人対人の会話が中心で，地域の指導者の都合に併せ指導日を設定し，指導を受ける形で進めてきた。しかし，月に一度1時間の指導では，なかなか学習の深まりを感じることはできなかった。祖父母と同居している子どもや日頃からユンヌフトゥバをつかっている家庭の子どもは，ユンヌフトゥバを聞いて理解することはできるものの，ユンヌフトゥバをつかって日常会話ができる子どもは一人もいない状況にある。このような中，月に1回程度のユンヌフトゥバ学習以外にも，子どもが自分で進められるユンヌフトゥバ学習の教材を開発することができれば，少しでもユンヌフトゥバにふれる機会が増え，そして実際に指導者や家族を相手につかってみようとする意欲が高まるのではないかと考え，本研究課題を設定し，教材開発に着手することにした。

いう外国語活動（英語学習）の要素を取り入れたものとなるように工夫を凝らした。

このほか、これまで子どもたちに写真や具体物で提示してきた野菜や果物などの食べ物についても、同じようにデジタル化し、パソコン操作によって、子どもが自分で知りたいユンヌフトゥバを、選んで聞くことができるようにした。一人のボランティアで30人近くの子どもの相手にする授業では、一人一人の学びの要求に対応することが難しいため、このようなデジタル教材を作成し、

パソコンで自由に扱うことができるようにすることが有効であるのではないかと考えた。

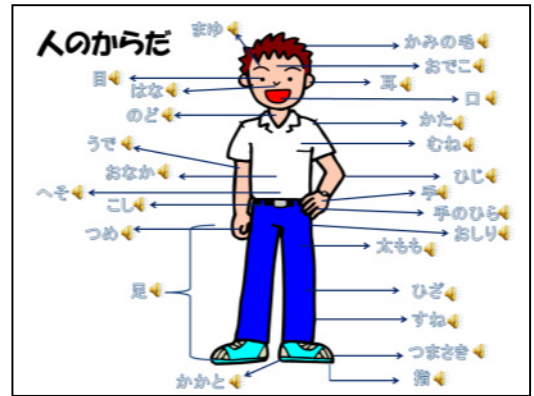
(2) ユンヌフトゥバの教材開発

ユンヌフトゥバを総合的な学習の時間で取り扱うようになって8年、地域のボランティアの協力も得つつユンヌフトゥバの学習が定着してきた。本町には本校を含め三つの小学校があり、それぞれの学校においてもユンヌフトゥバの学習に取り組んでいる。また、与論町教育行政の重点課題、3『学校教育の充実』においても「ユンヌフトゥバ等郷土教育の充実と国際教育及び情報教育」の推進を掲げ、町としても方言の継承等を重点として取組を進めている。その一つが右の写真の「与論のことわざカレンダー」の作成と配付、活用である。与論町教育委員会が中心となり、与論に昔から伝わることわざを日めくりカレンダーとして作成し、小中高校、子ども園、関係機関等に配布し、活用を勧めている。このことわざカレンダーもユンヌフトゥバをカタカナで表記しているため、読み方の分からない小学生や保護者には伝わりにくいという意見も聞かれ、デジタル化を行い、少しでも音声で聞くことができるように取り組んだ。

全部で31日分あることわざを、選択できるようにし、日にちごとにことわざとその簡単な意味を付け加えた説明を表し、音声がかかるようにした。これまでは日めくり式でことばを見るだけであったが、デジタル化することで音声を聞くことができるため、これまでのカレンダーと併せて使用することでより一層与論のことわざに親しむことができるようになると考えた。

右上の写真に例として出した3日のことわざ「思イドウ運命、請ドウ幸運」を右のように作成した。

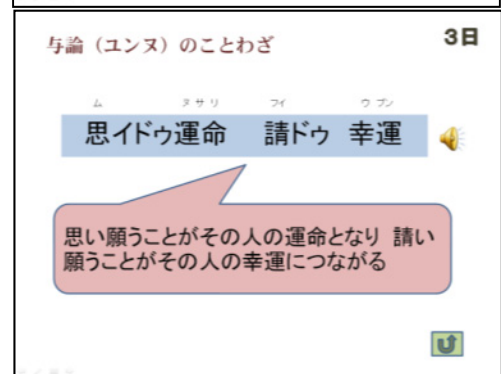
このようにして、町で勧めているユンヌフトゥバの取組



【デジタル化した教材】



【与論のことわざカレンダー】



について、教材として開発することで、学校のみならず、家庭や地域においてもユンヌフトゥバに慣れ親しむ機会を増やすことができ、町教育行政重点課題の一つにおいて、解決に向けた一方策に寄与することができると思う。

(3) 授業や休み時間での活用

ア ユンヌフトゥバ学習（総合的な学習の時間・創意の時間）における活用

本校では、前述のとおり全学年において年間10時間のユンヌフトゥバ学習を設定している。3年生以上は総合的な学習の時間、1・2年生は創意活動の時間の指導計画に位置付け、学習に取り組んでいる。

これまでのユンヌフトゥバ学習の反省や課題を基に、今回デジタル化した教材を用いて、実際の授業でどのような活用が図られるのかを検証した。1・2年生の授業において、体の部位について学ぶ時間に、ボランティアの方の指導と併せ、本教材を使用させてみた。

はじめに全体で部位の読み方や発音の仕方を学んだ後、グループや個人で練習をするときに使わせてみた。教室ではあちらこちらから練習する子どもたちのユンヌフトゥバの声が響き、教材の音声聞き取りにくいという反省もあったが、ボランティアの方一人に質問できる子が一人という状況では使い方を工夫することで、より効果的に活用が図られるのではないかという感想をもつことができた。



イ 休み時間における活用

校舎の階段に日常使うユンヌフトゥバを掲示している。カタカナで書かれていてもユンヌフトゥバに親しむという点で、子どもたちに意識させることを目的としている。

発音の難しいユンヌフトゥバを音声で聞き、耳からの情報として覚えることがより有効であると考え、給食時間に校内放送でボランティアの方による音声を流していた。「いただきます。タバーラリェンドー」「ごちそうさま。マサイビュータン」という挨拶の単語がほとんどであった。しかし、例えば「こんにちは」を表わす言葉がユンヌフトゥバにはない、というように共通語で表される言葉と同じ意味をもつユンヌフトゥバがないということもあり、単に音声や単語だけを聞いても、言葉そのものを覚えるだけで、会話などにつかえるようにはならなかった。

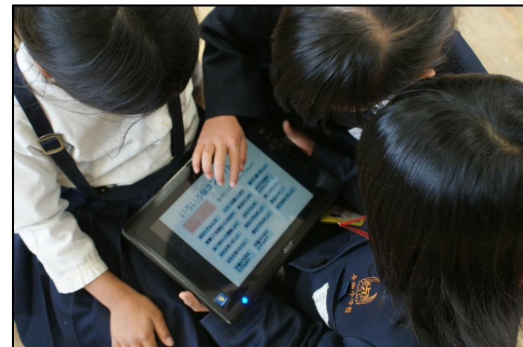
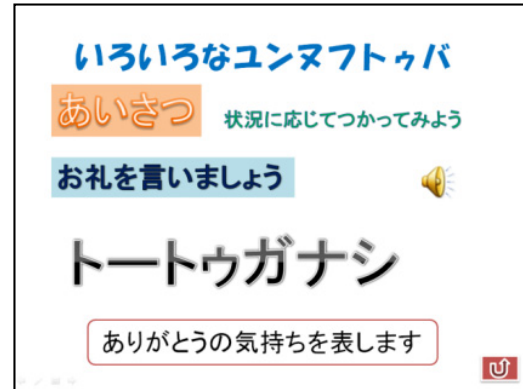
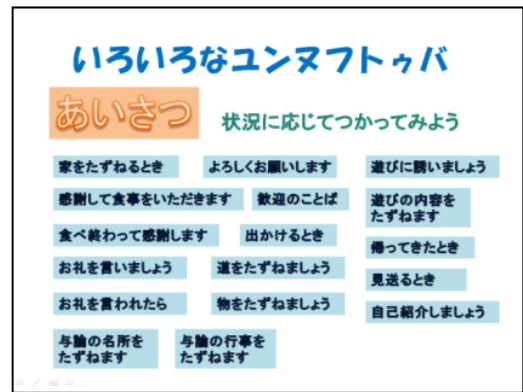


そこで、これまで音声で聞きなれているユニヌフトゥバをどのような状況でつかえばよいかということが理解できるような教材を作ることで、会話の中身や会話の状況に応じたユニヌフトゥバのつかい方が認識できるようになるのではないかと考え、次のような教材を作成した。

前述のとおり、「こんにちは」に相当するユニヌフトゥバはないということをふまえ、「共通語のこの言葉に相当するユニヌフトゥバは何？」という考え方から、「このような状況で使うユニヌフトゥバは何？」という考え方で教材を作成した。

右のように日常の様々な状況を設定し、そのときにはユニヌフトゥバで何と言えばよいかということで作成を行った。

最初の画面で状況を選択すると、次のような画面が現れ、選択した状況とそのときに使うユニヌフトゥバをカタカナで表記し、そして実際に音声で聞くことができるようにした。このようにしてこれまで、耳で聞いていたユニヌフトゥバを具体的な場面でつかうことができるようにした教材を授業のほか、休み時間でも子どもたちにふれさせるようにした。特に、低学年の子どもたちはユニヌフトゥバそのものを覚えることは早く、給食時間の放送でユニヌフトゥバは覚えており、この教材で、知っているユニヌフトゥバがどのような場面でつかえばよいかということが理解できつつある。



4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 現在活用している紙や音声CDなどのユニヌフトゥバの教材等をパソコンで使えるようにしたことで、これまで地域ボランティアの方の協力を得なければ進めることが難しかったユニヌフトゥバの学習が担任により簡単に進められるようになった。
- 子どもがパソコンで簡単に自由に操作し、自分の興味のあるユニヌフトゥバについて、見たり聞いたりすることができる教材を作成したことで、これまで以上にユニヌフトゥバを覚えたい、話したいという意欲を高めることができた。

(2) 今後の課題

- 作成した教材はまだまだ数が少ない。年間10時間で学年部ごとに計画されているユニヌフトゥバ

学習の教材として確立するために、さらなる改善を進める必要がある。

- ボランティアの指導が必要な場面とパソコンの教材だけで進められる場面とを明確にすることで、その時間の目的やねらいに応じた計画がなされ、もっとボランティアの指導を生かすことができるようになると考える。
- 今年度は教材開発を目的とし、ユンヌフトゥバ学習の実際の授業内容を見て、このような教材があればこの場で活用できるといった観点で進めてきたため、実際に授業において教材を活用できた部分は少なかった。今年度の研究をもとに、次年度実際にどのように活用を進めることがよりよい教材の活用につながるのか、吟味していく必要がある。
- ユンヌフトゥバは、与論町の中でも集落によって違いがある。今後はこの教材を町内に広げ、各学校で自校化したり、各集落で自分たちの使うユンヌフトゥバに修正したりして、いつまでも後世に伝えていけるようその手立てを模索する一方策となれば有難い。



※ 参考文献

- ・「与論方言辞典」 菊 千代・高橋俊三 著 武蔵野書院発行 平成 16 年
- ・「与論方言集」 菊 千代 著 与論民俗村発行 昭和 60 年
- ・「日本の方言の多様性を守るために」 国立国語研究所発行 平成 23 年